

報



會

會 岳 山 本 日

11

月二十年六和昭

老兵の嘉門治物語

いつの年であつたか、然し近い頃ではない、上高地の河童橋が未だ吊橋にならぬ前、猿橋のそれならぬ、小規模の持ち出し作りのさ、やかな橋であつた時分（山岳第一年三號口繪参照）、人通りも日に一組か二組の登山者達に過ぎぬ、午さがり、手すりもない洗つた様に綺麗な橋板の上に仰向ひて、寝そべつた自分、ふと岳川岳の、あなたから、六百岳と一抹の白雲棚引くと思つたは夢、橋下深々たる梓川の水面を、かすめた穂高嵐しは、此若い山人の現實を呼び迎へた、其頃であつた、「嘉門治おやち」とこんな話を交した事がある。

「東京つて廣い所だと、聞くが、茲で會ふ衆は、どうして皆んな、知人なんだらう？」先づ此んな意味の驚嘆した山語が、おやちの口から出た。今、おやちが生きて居たら、「成程東京つて廣大な所だ、山で會ふ衆は皆んな知らない人だ」と嘆じさせるかも知れない。その頃の山の巡禮は一脈相通じたる山の参拜者であり、慈母の懷に憧れて山懷に入る同じ血を引く山の子であつた。

又こんな事もあつた、嘉門治老爺の宮殿であり、王城であり、時の山の巡禮者達には山の主の玉座とも見えた、あの明神池畔の番小屋に、岩魚を頒けてもらひに出かけた。どうか魚を賣つてくれと頼んだが、「今日は秤がないから駄目だ」との一言で

中々應じさうもない。秤がなくとも魚は澤山あるし、第一味覺が中々承知をしない。そこで、秤がなくとも目分量で魚を賣つてくれと、復談判を初めたが、おやち、いつかなんか云はぬ。押し問答の末、嘉門治おやちの曰く、「目分量で賣つて高くつては前さんの損だ、安くつければおれの損だ、まあ止めときなさい。」

未だこんな事もある、其頃でも上高地の木は方々に切倒されて、若い山旅人の血を沸したものだ。事實、上高地の木は森林美として嘆美するには數も大きさも、さまで問題でないかも知れない。然しあの景觀に點綴さる、風物としては、あの木でも小さな河柳でも、切り倒されるには惜しい。自分の髪の毛でも、そぎ倒される如き事件であつた。其餘憤が嘉門治おやちの耳に入つたら、即座にかう云ふて居た。

自分の若い頃に上高地の木は皆んな切り倒された事がある。然し今はかうして大きくなり茂つてゐるじやないか、何にもそんなに心配する事はない、又六十年もすりやあ、元の通りになるさ、いとも期かに解決をつけてくれたには、口が寒らなかつた。由來山岳會創立されて廿七年未だ、おやちの云ふた六十年の半分にもならぬ。切られた木は芽を吹いて、大きくなつたであらうか、残された木は更らに二十七年の年輪を加へたであらうか、思ふと慄然たる事もある。嘉門治おやちの豫言が適中してくれ、げ良いが。

未だ話はつきぬ。嘉門治は、山案内をする時、其勞銀の算出方法を斯くする。おれは一日上高地で魚を釣れば二圓五十錢得られる、だから山へ行く時は、それだけの働きのもらはねばいやだ。然し他の衆はおらと同じにする事は出来ぬ、普通の勞銀でよい。只聞いたのでは、ぢいさんが慾張りらしく思はれる。然し事實は當時の若い山旅人達には、如何にも眞率な卒直な、恬淡たる彼れである事を、はつきりと知り得るのであつた。二十餘年の時の流れは、長しとも云はぬ、短しとも言へぬ、今の世相から考へ、今の經濟觀からは全く隔世の思ある當時の事である。今しばらく思出を語らう。當時の山入りの人夫賃は最低は白馬岳方面の五十錢、上高地方面では一圓少であつた。その時に、おやち獨りが格外であつたが、それは前に述べた如き基礎に樹つた計算であつた。今日の山入りの人夫達は何れも山案内と稱する。道のある所をのみガイドする事が、眞の山案内者であらうか。それ等の理論は別として、其當時は、上高地に嘉門治、黒部に品右衛門、有明に類藏此三老強のみの日本アルブスであつて、他の追従を許さざりし時代であつた。實に日本アルブス開山の黎明期であつた。山々峯々澤々の末の末迄掌を指す如きは誰れ人も企及し得ざりし時であつた。他の人達は全く只の荷負ひであり、雜兵であつた。彼れおやちは一船の船長であり、パイロットであつた。實質

的に他の人夫達は、老人を中心として一つの集團を作つて其手足となつて働くのみであつた。即ち隊長と手下、或は封建的な物の云ひ方かも知れない。そこに勞銀の差別的待遇も、全く理屈的にも彼等は何等の苦情も起さず、喜んで勞務に服するのである。おやちに云はせると、おれは他の者共よりは偉いから、高い勞銀を要求すると云ふ階級的意味ではない。平素の收益を標準としての考へ方であり、人夫達は他の仕事をさせてもさうであるから、當時の標準に相當した賃銀を、もらへばそれでよい、強て高額を要求する必要はないと云ふ理由である。今の世相から考へたら理屈は違ふかも知れぬが、當時としてはそれが眞理でもあり、又他の反感を買ふ理由にもならぬ。

未だ話はつきぬ、おやちは愈々山の旅に入る、雨の爲め一日滞留ときまる、其日は日常はいらぬと辭退する。當時の吾々をして、人の爲めに一日の時を費す事は、一日の勞銀を給與すべきである位の事は心得てゐる。然し彼おやちは、何んと云ふても滞留した時は、それを計算に入れぬ。理由は少し經濟觀念を離れた云ひ方ではあるが、そこに云ひ知れぬ味があり、山人の妙諦があり、おやちの人格が味はる。曰く「一日働かないで御飯を頂戴して居たのではお金は頂けない、それでは未だうま味が出ない。更らに曰く「おれは他の者共よりは餘けに高給を喰む、だからかうした、雨で滞留した

時は只御飯を頂くだけで充分だ」と云ふ釋明になる。かうなると、おやぢは賢か愚か、野人か經濟人か、判らなくなる。

未だある、老麗人天勝の手品ならぬ、未だ出る。おやぢの先達で烏水老、仁兵衛老の驢尾に附して(勿論兩兄とも老でもなく、斯く云ふ老兵も白髪三千丈ではなかつた昔の話)鎌尾根の嶺に、江戸時代の名残、下谷は伊豫紋の板前に、龜甲萬の野田醬油を特に壓縮(と云ふよりは蒸縮めた)した一升樽を、ボンと底抜いて、あたふ日本アルプスの鬼の好物とした。その時の話さ、野口五郎、鷲羽岳、水晶岳、雲の平、薬師、曰く曰く、最後のしめく、りの飛驒の國は船津の町、然かも、大火のあつて間もなき時、嘉門治老を先達に一行十數人、今で云へば蒙古を渡る隊商か、先づ何にか一事ありさうな時代風俗の者ども、船津の町にぞ着きにけり、丁度夕暮せまる時。勸進帳ならぬ、從ひ来る山伏の強わ者共と、辨慶は誰れか、從者の山人共は、吾等の宿の庭前に整列、おやぢ嘉門治を先頭に、頭布ならぬ、今様いでたち

夕に近く、吾々は一行の者共と、それこそ盡きぬ別れに、盡きぬ盃を交しても茲に別離の宴を張り、山から山へ谷から里へと、技に人里に出て、つきせぬ縁を別たんと、強ての話も、おやぢの一言に、止めざるを得ないのであつた。

おやぢ曰く「望外の勞銀を頂いて若人達を船津の町に一宿させるのはわづらひが多い。責任者たる老翁としては、その總ての報ひと、それを全ふして家路へつかしむる事の外、望みはない」との一言につきて居た。だからこそ夕やみ迫る、船津の町を引きつれて去つたのである。

未だある、おやぢ曰く、「自分は歸路の日當は頂かぬ、理由は前述と同様、然し若人には與へてくれ、然し船津の町のたつつけは買はせませぬ」。

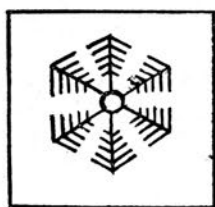
上高地、穂高山下に終始六十年嘉門治老の半面は面壁の聖者の如くに見る人あらばあれ、他面、斯る人情味ある山人を知る人ぞ幾人か。彼れ聖人たりと云ふに非ず、彼れ偉人なりと云ふに非ず、山の人を学む、その乳人たる山、彼れの如き人情味餘る、山の素朴さを味ふ、ハヒマツに雪白き時、雷鳥母子を懷にいだく、その偉大さを思ふ。だが斷つて置きますよ、此老兵、おやぢから、岩魚一尾頂戴した事もない。だがあの明神の池の小屋で岩魚のウルカを馳走になつた時の舌端のニガ味は、人の世の定命になめつくす辛味苦味甘味

此れも亡友辻村と共に居ての話の一つ。老兵の話も盡きた、くどいが云ふ山に入つた心。徳本峠を島々谷から越へて、あの岳川岳の絶對の姿、あれが未知の戀人でなかつた山人があらうか。若い現代人も、若し此老兵が復あの峠を越えても、吾れ久戀の姫を得たりと胸は、おの、くであらう、待てよ、徳本を上高地へと下り、九十九折ならぬ、あの霞澤の下、大森林の中、つく杖の、石突きに、自づと昇り来る、枯れくち葉、吾が老兵は、そこに永久の眠を待つ。

母の懷にはぐくまれ、母の慈愛に生きた吾れ、山懷に歸る、此れ人の生れ出でし森林に歸るのである。誰れ人か、山彦の去る森に響く、こだまの音、なつかしき、人の世を忘れて、吾れ山に歸る。

山に行く人よ、山懷に歸れ、老若貴賤、男女、何れを問はず。吾れ人と共に、山懷に入らん、斯くしてぞ、吾が老兵の夢ぞ、圓かなる。

高野 鷹藏



告報務會

十一月十二日理事會報告

出席 理事六名、委任三名。

一、役員總會推薦の理事候補者東京關西共に最後の決定を見たるを以て會員へ通知の手續を執る。

二、「山岳」編輯、別裝「富士山」のこと、登山團體の調査等につき夫々報告ありたり。

三、山小屋建設候補地としての冷ノ池は一先づ打切る旨冠理事より富山營林署へ申送られたる旨報告。

四、昨冬來研究係にて計畫を進め來れるガイドブックは材料尙不足せると研究係多忙のため一先づ中止するに決定せり。

十二月三日理事會報告

出席 評議員三名、理事六名。

委任三名。

一、會員より理事候補者の推薦なく曩きに役員總會より推薦せる七名の理事候補者は投票を用ゐずして當選に決定(別項参照)

二、會員登山經歷表は明年一月理事會に浦松理事より原案提出。

三、全國登山團體調査の成果は機を見て「山岳」の附録とすべし。

四、會員大會は明年一月廿四日開催五、「山岳」合本用ケースの布地を決定し意匠は松方理事一任。

六、別裝「富士山」雜誌「山岳」編輯に關して報告ありたり。

第五十三回小集會

十一月三十日三會堂に於て行はれた小集會は午後六時開會、冠松次郎氏が文部省映畫「尾瀬」の撮影に就

ての説明に始り、田部重治氏の「山岳と文學に就て」の御話が約一時間あり、次で「黒姫川北又谷及柳又谷」を塚本繁松氏が約一時間半話され、九時半盛會裡に閉會した。

映畫「尾瀬」は尾瀬沼、尾瀬ヶ原を中心として撮影されたもので、燦、至佛の登山、三條瀧等を含む美しい寫真であつた。天候不良の爲に最初の計劃の只見川銀山平方面の風景の收められてないのは憾しいが、撮影方法にも新しい所があり、水、雲の動きと、美しい高山植物の大寫は一段と興味を覺えた。

田部氏の御話は非常に珍らしい事で、多くの會員に聞いて頂き度いと思つてゐた。音樂、美術と文學の關係より、文學に現れた山岳に就て色々語られた。山を主題とした小説詩歌の歐洲に於ける歴史、我國の古い時代の山を詠する和歌等に關する文學論は耳新しいものであつた。

既に田部氏より之に就いて執筆下さるとの事であるから「山岳」に發表される時も遠くはない。

塚本氏の柳又谷北ノ又谷の御話は從來未踏の溪谷として殘されてゐた所であるのみでも興味は深い。北ノ又谷の深淵と岩床の美しさ、柳又谷の惡さを初めて我等は耳にする事が出来た。尙當日廻覽に供された塚本冠兩氏の此地方の寫真數十葉は黒姫川を知る爲には與つて力大なるものがあつた。當日の來會者約百名。

(角 田)

新理事選任通知

今般本會理事改選に際し、改選せらるべき理事七名に對し役員總會より同數の理事候補者を推薦致し、十一月中旬會員各位に御通知申し上げ各位よりの候補者推薦を待居候處締切日たる十一月末日迄に御推薦の向無之、改選すべき理事の數と理事候補者の數と同數に相成申候。從て曩きに役員總會より推薦したる七名の理事候補者は會則第十二條及び附屬細則二の(ト)に據り選舉投票を行ふ、となくして當選、明年一月より就任せらるることに決定致候。

新任の七氏(東京・英木猪之吉氏、神谷恭氏、田中菅雄氏、伊藤秀五郎氏、關西・中原繁之助氏、加納一郎氏、津田周二氏)いづれも練達の士本會は茲に有能の新理事を迎へて今後の活躍發展を期するものに候、會員各位に於かれても倍舊の御支持御後援を賜はらんことを奉懇願候、尙各理事の事務分擔は更年後決定次第會報誌上にて御報告可申上候。

右不取敢御通知迄 敬具

昭和六年十二月

日本山岳會役員總會

二仲、會務全般並びに理事改選等御報告のため會員大會開催の豫定なりしも年内餘日なきため明年一月二十四日赤坂三會堂に於て開催致すべく詳細は追て御通知可申上候間御諒承被成下度候

新入會員(昭和六年中)

七六

Club Vol. XXV #2 Nov. 1931.

藏前山岳部々報 第二號

合計

八二二

Club Alpino Italiano Rivista Mensile #9 Sept. 1931.

北大文武會山岳部々報 第三號

内死亡

二

The Alpine Journal Vol. XLIII #243 Nov. 1931.

關西大學山岳部報告 第二號

退會

一四

山と溪谷

陸地測量部年報 昭和五年度

其他

三

山人俱樂部

廣崎、渡邊兩君遺難一周忌に際して 筑紫山岳會

差引現在(昭和六、二、二) 七九三

會員數(二〇現在)

信濃山岳會々報 第二號

地形學入門 香川幹一著 古今書院

圖書基金申込會員氏名

旅第七年第二一五號 東京曉山岳會

實用スキー術 長田進著 木犀社書院

本誌第十號にて報告したる以後の申込者は左の通りである。

岳友第八二一八三號 日本岳友會

山と溪谷 山と溪谷社

東京 高頭仁兵衛(二〇)

山彦 第十一號 東京山彦山岳會

世界山水圖說 志賀重昂著 正續二冊

前回發表の分を加算すれば、現在四十五名五十九口である。

山 第二十一號 橫濱山岳會

地震 第三卷十號(同 上)

新着圖書

旅行 第六八六九號 東京登山クラブ

萬二千峯の金剛山畫帖

The Prairie Club Bulletin #209

ベテスツリヤン 第二三五號

日本名勝地誌 第十一、十二編二冊

The Mountaineer Vol. XXIII #11-12 Oct.-Nov. 1931.

踏跡 第三號 東京登山旅行會

(伊藤秀五郎氏寄贈)

Trail and Timberline No. 156-157, Oct.-Nov. 1931.

三角點 第九輯 フアガス・クラブ

山行案内 第十一號

Natural History No. 5 Sept.-Oct. 1931.

山 幸 第八號 阪神山岳會

General Index of the Geographical Journal Vol. 1-20.

Bulletin del Centre Excursionista de Catalunya No. 436-437, Sept.-Oct. 1931.

臺灣山岳部 第三年六號

Mosso—Life of man on the high Alps.

Die Alpen Les Alps. Le Alpi No. 10-11, Oct.-Nov. 1931

旅 昭和六年十月、十一月號

Conway—With Ski and sledge over arctic glaciers.

The Geographical Journal Vol. LXXVIII #4 Oct. 1931.

アルカウ趣味 第二〇號

小島島水著 雲表 壹冊

Bulletin du Club Alpin Belge Vol. VIII No. 23-24 Juin-Sept. 1931.

山小屋 第一號 朋文堂

萬國日本名所圖繪

La Montagne. Club Alpin Français #234, Sept.-Oct. 1931.

山と溪谷 第十號 山と溪谷社

園藝の友臨時増刊 高山植物

Bulletin Appalachian Mountain

管見錄 第七一七二號 大阪管見社

北海道人山岳會

飛驒史壇 第十卷第十一號

飛驒史談會

甲南高校山岳部報告 第一、二

登歩溪流 第五號 夏山の報告

東京登山溪流會

野村實遺稿 みのる

會員現在數

會員總數(昭和五、二、二) 七三六

退會者

昭和六年十月二十二日付

橫濱市 山中太三郎

會員計報

(二二四五) 京都市 石戸 宏

昭和六年十一月三日北穂高麓谷に於て登山中遭難逝去せらる。本會は謹んで茲に哀悼の意を表す。

日本山岳會役員總會



冬山の消息

北アルプス

一ノ俣スキーヒュッテ 槍ヶ岳登山の根據地たる一ノ俣小屋は今秋新たに三間四階三階建スキー専用ヒュッテを従来の小屋の附近に建設せり十二月下旬より番人滞在、營業をなす由。

中の湯、上高地温泉、清水屋（庄吉宅）五千尺 吉城屋は何れも冬春期營業繼續。一ノ俣小屋を初め以上の宿屋料金協定せり、即ち三食付一人泊料一圓五〇錢。食料持参自炊は小屋代五〇錢、外に薪代一人三〇錢。

南アルプス

北澤スキー小屋 宿泊料三食、味噌汁付一圓、番人は登山者ある毎に同行す。現在の備品は左の如し。布圍三十枚、薪一ヶ月分、炭三俵、白米一石二斗、味噌六貫目、醬油五升。

富士山

吉田口五合目桂屋號 宿泊料三食付二圓、食料持参自炊は小屋代一泊一圓（寢具、薪付）希望者は富士吉田町池谷佐重宛豫め通知の事、登山者ある毎に番人同行す。

上越國境

土合山の家 湯槍會驛下車約一里湯槍會川上流清水トンネル入口。收容百名。寢具及食料完備、使用料三十錢、食 Morrow

十五錢、晝二十錢、夕二十錢。白樺ヒュッテ 今冬増築擴張約一坪半。冬期收容人員約二十名となる。

陸地測量部新刊地圖目錄

五萬分一地形圖 修正

仙臺 二號 吉岡 一面

松山 二號 松山南部 一面

山田 十號 丹生 一面

岡山及丸龜 二號 下津井 一面

五萬分一地形圖 鐵道補入

漆別 九號 丸瀬布 一面

同 十三號 白瀧 一面

夕張嶽 四號 札内嶽 一面

旭川 五號 愛別 一面

青森 十六號 鯉ヶ澤 一面

八戸 二號 八木 一面

水戸 十號 水戸 一面

同 十一號 石岡 一面

和歌山 一號 櫻井 一面

同 六號 五條 一面

酒田 四號 鶴岡 一面

同 六號 五條 一面

名古屋 一號 名古屋北部 一面

同 五號 津島 一面

京都及大阪 四號 奈良 一面

同 十五號 三田 一面

同 十六號 神戸 一面

同 八號 甘木 一面

小倉 八號 甘木 一面

二萬五千分一地形圖

沼津近傍 十一號 天母山 一面

同 十四號 上井出 一面

同 十七號 南部 一面

同 十八號 篠井山 一面

宇治山田近傍 十三號 相賀浦 一面

二萬五千分一地形圖 修正

小田原近傍 十二號 關本 一面

二萬五千分一地形圖 鐵道補入

旭川近傍 三號 愛別 一面

八王子近傍 六號 飯能 一面

同 八號 拜島 一面

水戸近傍 三號 久慈 一面

同 八號 水戸 一面

同 八號 八幡岩 一面

小千谷近傍 八號 岩澤 一面

松本近傍 六號 明科 一面

宇治山田近傍 十號 明野ヶ原 一面

半田近傍 二號 西尾 一面

四日市近傍 二號 彌富 一面

五萬分一朝鮮地形圖 修正

北青 二號 瑞川 一面

五萬分一朝鮮地形圖 鐵道補入

忠州 十五號 平澤 一面

二萬五千分一朝鮮地形圖 修正

大田地方 三號 沃川 一面

同 九號 大平里 一面

同 十號 儒城 一面

同 十一號 鎮岑 一面

二十萬分一帝國圖

石垣島 一面

宮古島 一面

二十萬分一帝國圖

鐵道補入

神子元島 一面

百萬分一東亞輿地圖 修正

奉天 一面

五萬分一都市近郊圖 修正

京都近郊 一面

二百五十萬分一東亞大陸圖 修正

計五拾貳面（十月三十日出版）

五萬分一地形圖

豐原 十一號 瑞穂 一面

五萬分一地形圖 修正

仙臺 三號 仙臺 一面

德島 九號 寒霞溪 一面

宇治山田 十三號 名張 一面

五萬分一地形圖 鐵道補入

廣尾 十號 大樹 一面

八戸 九號 八戸 一面

白河 九號 須賀川 一面

同 十二號 大子 一面

水戸 六號 湊 一面

同 六號 湊 一面

岐阜 二號 八幡 一面

同 八號 大垣 一面

小倉 四號 吉井 一面

二萬五千分一地形圖

甲府近傍 十五號 精進 一面

同 二十號 切石 一面

同 二十一號 身延 一面

宇治山田近傍 四號 波切 一面

同 八號 濱島 一面

同 九號 片田 一面

德島近傍 八號 引田 一面

二萬五千分一地形圖 修正

東京近傍 二號 松戸 一面

同 三號 船橋 一面

二萬五千分一地形圖 鐵道補入

青森及弘前 二十號 五所川原 一面

近傍 一號 小千谷 一面

小千谷近傍 七號 小千谷 一面

村松近傍 十號 森町 一面

半田近傍 三號 吉田 一面

津近傍 五號 津 一面

同 九號 久居 一面

名古屋近傍 三號 豐岡 一面

同 六號 知立 一面

一萬分一地形圖 修正

大阪近傍 一號 吹田東部 一面

同 二號 大阪東北部 一面

大阪近傍 四號 大阪東南部 一面

同 十號 住吉 一面

同 二十一號 大阪港 一面

東京近傍 七號 新井 一面

五萬分一朝鮮地形圖 修正

元山 十一號 釋王寺 一面

百萬分一東亞輿地圖 修正

開封 一面

南昌 一面

長沙 一面

寧波 一面

百萬分一東亞輿地圖 鐵道補入

吉林 一面

計四拾貳面（十一月三十日出版）

圖書室當番幹事日割

一月

八日 藤島 二十日 伊藤

十一日 横 廿二日 神谷

十三日 松方 廿五日 田中

十五日 松本 廿七日 鳥山

十八日 茨木 廿九日 角田

二月

一日 浦松 十七日 松方

三日 渡邊 十九日 松本

五日 藤島 廿二日 田中

八日 茨木 廿四日 鳥山

十日 伊藤 廿六日 角田

十二日 神谷 廿九日 浦松

十五日 横 三月二日 渡邊

圖書室は右に掲げた日、即ち毎週

月水金の三日間は夕刻五時頃より必

ず開いております。諸雑誌の製本も

見事に出来上り、圖書係の友人から

寄贈を受けた快適な長椅子も運び込

まれました。讀書に會談に、夜も温

いこの室へ會員諸氏のお立寄り下さるやうお勧め申し上げます。圖書係



信通員會

富士山の山小屋

十二月六日に黒田正夫氏外數名と吉田口五合目に一泊、七日に七合三勾まで登つたが、今年も亦風と雪で追ひ返されてしまつた。然し五合目より馬返しまでのスキーは面白く使えた。

風の強い富士では二、三の山小屋の開放を切望して止まない。七合、八合邊に一息つける小屋があつたらどんなに便利だらう。又七合が八合に泊つてゐればチャンスもつかみ易いのだが。山麓の人々は開放よりも後の戸締りを心配してゐた。戸が開いてゐると屋根を飛ばされると云つてゐる。我々一行が七合三勾の小屋に行つた時、戸が開いて雪が澤山入つてゐた。そして休んでゐると間もなく山麓の夫人が二人修理の爲に上つて来て、嚴重な釘付をしてゐた。前に登つた人の惡意か、不注意だらう。開放を望むと同時に、我々も登山道徳を守らなければ駄目だ。

(角田吉夫)

鹿嶋のカクネ里

十月十一日、スポーツ・ウィーク

を利用して一行八名、鹿島に行く。小熊ヶ原は色づいて目に沁むやうな紅葉。さだまらぬ天氣は薄日して時雨。鹿島の里は秋色深い。叢の中で見つけ出したあけびの味は、秋の山旅なればこそ。大川沿ひに二日、颱風に襲はれて一日、その上、尾根のジャン／＼で——お蔭で伐り開きが残つた——カクネ里へ入るのに五日も費した。此處は園谷、穂高の園谷よりもずっと大きい。雪溪も廣大夏が思ひやられる。いづれ、第二の穂高にならう。十六、十七日は、昨夏先輩が手なづけたカクネ里バットレスの登攀。俣松のジャン／＼がある八百米の岩壁は、さすがに登りごたへする。鹿島北嶺の上で始まつた水雨は、昨夜途中で假睡した軀には相當こたへた。國境尾根からカクネ里への下りは、何處からともかなり悪い。カクネ里大谷——五龍と鹿島嶺の中央——を下る。一夜毎に紅葉が濃くなる秋の山に、新雪に粧はれる時に未練を残して、歸路は、鹿島嶺を経て龍川に廻るものと、往路を引き返して黒澤を越えて梁場へ。

(一九三二、一一、九)

京都帝大旅行部)

秋の山ふたつ

十一月一日 湯檜曾——藤原——上ノ原——湯ノ小屋——狩小屋澤

二日 狩小屋澤——至佛山——ムジナ澤——尾瀬ヶ原山鼻小屋

三日 鳩待峠——鎌田——沼田

同月廿一日 甲府——波高島——早川釣橋——大島——雨畑

廿二日 西澤峠——所ノ澤小屋
廿三日 策ヶ岳——千挺木山——奥澤上流野營
廿四日 奥澤——老平——大島——飯澤——甲府
(田中菅雄・藤島敏男)

那須より

去る七日、那須山茶臼岳に登山致しました。峰の茶屋下で大風に遇ひ思ひ止つて下山し、翌八日遂に登る事が出来ました。前日の風に茶屋の内儀が吹き飛ばされ、怪我をしたと云つてゐました。鐵夫達も、余りひどい風で皆下つたとの事です。自分も思ひ止つて下りた事を、好いこととしたと思つてゐます。朝日岳より三本橋の方へ、行き度く思ひました。日数がなくて中止しました。大風によつて、一の經驗を得たことを嬉しく思つてゐます。

(石塚秀次郎)

シカゴより

日本山岳會も愈々お盛の様に「山岳」誌上にて拜承、蔭ながら遙にお喜び申上て居ります。

先年小島烏水氏と登山の計畫がありました。同氏の御歸朝と、小生の東部移住とにて、果す事の出来なかつたワシントン州最北端、マウン・ト・ペーカーと並立して居ります、Mt. Shuksan と云ふ水河と大岩石より構成されてゐます嶺峰に、本夏登攀致しましたが、其内に記事と寫真とな、「山岳」誌にお送り申し度いと思つて居ります。

右の旅の序に、先年横氏一行の跋渉されたカナダの、ジャスパー方面にも足を入れ、久し振りに山氣を、十分に吹き込んで参りました。

アルペン・カレンダー

新刊紹介

山と溪谷社編並發行・菊版五三頁
定價 一圓二十錢

シュベーマンのヤプロードイツヒの様な山の繪屏である。中に收められた寫眞が、全部日本の山であるだけに毎日掛けて眺めるのには親しみがあふ。從來出版された日本のものよりは、遙かに優れてゐる。併し印刷は、外國のものに比べて未だ未だと云ひ度い。掛けて置いて眺めるものである以上、もつと室の飾りになる様なものであつて欲しい。外國の曆には、剃いで捨てるのが惜しい様なものがある。印刷にもつと注意して欲しいものだ。繪屏の大事な點は、それが一の室内裝飾になる事だ。その點が欠ければ、繪屏としての價值は駄目なのである。一頁寫眞二枚といふのが大分あるが、之なぞもその點からして、よくないと思ふ。

内容に就て云へば、北は千島から北海道、中部日本、南は臺灣迄集めてあるが、材料不足の爲め知らないが、寫眞の撰擇にはもつと注意を拂つて欲しい。玉石混淆で、然も石の方が多いのはいけなない。スキーの季節が來た爲めではないが、壯快なスキーの寫眞が一枚もないのも遺憾である。編輯の方法にも十分考へる余地がある。

初めての試であり、又折角いゝ事なのだから、來年はもつと水準を高めて、逆に外國へ贈物として送れる丈けに、恥しくないものにして欲しいものである。

ヒマラヤに挑戦して

伊藤 愿著 黒百合社發行
菊版二百頁 寫眞並地圖多數
定價貳圓八十錢

之は獨乙のパウル・パウアーが、千九百廿九年のカンチエンジュンが登攀を試みた後に、その報告書として出版したもの、翻譯である。

此のパヴァリア隊の當時の登攀が、假令失敗に終つたとは云へ、如何に壯烈なものであつたかは、既に多くの人の知つてゐる所であると思ふ。本年の夏、再び此の一行はその準備を新にして、カンチエンジュンガの頂上を目指したのであつた。そして遂に犠牲者を出して、征服の夢は、再び不可能に終つてしまつた。

んで、再び當時の氣持を新にした。
近頃出版された山の翻譯書と云ふと、誤譯の指摘どころか、一體何を譯してゐるのだから解らない様な、でたらめが多いのだが、此の點に就ては、此の記者は、随分忠實に、痛々しい程注意して譯してゐる跡が見られる。強ひて難を云へば、文章としてもう少し練つて欲しかつた事である。さうすれば、恐らく原文よりもつとよくなつたかも知れない。
此の本の附録になつてゐる、準備の事や携帶品の事も、山へ行く者にとつて示唆となる所が多い。
ヒマラヤに向つて、我々の目が向けられつゝある時、此の翻譯を得た事は何よりである。若い人達の一讀を薦めたい。それだけではなく、山登りといふ事に就て、一應の理窟を述べやうとする人達にも、敢て此の本を讀まれるようにと云ひ度い。

編輯後記

先月は旅行中の爲め、角田氏を煩はして編輯して戴いた。

今月號のカットは、土井利位の雪華圖説の中から取つて用ひた。その他にも面白いがあるので、此の次に亦利用したいと思つてゐる。

久し振りで、高野氏の快筆を得た。嘉門治を描き得て面白く、然も山を想ふの情、切々たるものがある。

序に希望を述べさして戴けるならば、之等日本の初期の山岳人に、是非毎夏數日を割いて山へ遊ばれる事

を勧め度い。上高地への便もよくなつたのだから、數日にして十分であらう。今の上高地が嫌だと云はれるなら、山は昔のまゝと氣持に於て變らないと云ひ度い。人が嫌だと云はれるなら、あすこで眞剣に山を求めゐる若い人達にだけ、目をお付けなさいと云ひ度い。山案内にしてもさうだと思ふ。その技倆に於て、人格に於て立派なものも随分ある。山衰へたりと云はるゝ前に、是非山へゆかるゝ事を勧めたい。來年は是非にと、此處へ記して置かう。
此の冬は今の所雪が少い様だ。山の事故少き事を祈つて置く。

會費拂込

昭和七年度會費六圓を振替にて成る可く早くお拂ひ込み下さい



昭和六年十二月廿八日 印刷
昭和六年十二月三十日 發行

發行所
編輯兼人

浦松佐美太郎
東京市芝區榮町一
不二屋ビル
日本山岳會

(刷印堂明細)

スキー スケート 用品 売出し

六つの華の美しい時が訪れて参りました。

今冬 美津濃ではシユナイダー氏の愛用せるアムスツスモデルの各種用品やノルウエースエーデンのものを始め絶対他の追従を許さない優秀至廉なる美津濃ヒツコリースキー及び各用品が取揃つて居ります。スキーの御用意は是非美津濃へ。

一揃 ￥10.00 スキー 發賣 (スキー 締具 杖 帽子 手袋)

一揃 ￥20.00 スキー 發賣 (スキー 締具 帽子 手袋 靴)

最も完全なる他店の模倣出來ざる品です

阪 京 戸
大 東 神

淀 屋 橋
小 川 町 通
元 町 通

美 津 濃

名 古 屋
京 都
大 阪 南

大 須 門 前
四 條 大 通
日 本 橋

スキー スケート 用品 売出し